

作業者たちは共通して、石綿の扱いは実は知る必要のないことであると述べた。彼らは仕事でこれに関することは一切無いからであった。回答者の多くは、自分の仕事の系統では石綿に接触することはまったく無い、または石綿が発見された場合仕事を辞めるつもり、または辞めたので、石綿に仕事で関るような状況になることは決して無いと言い張った。「石綿の扱いは知らないし、知る必要もない」という回答者が少数いた。また初めのうちは石綿含有材料関係の仕事をしたと言ったにも関わらず、もう石綿に直面する事は無くなったと言う回答者もかなり高い割合でいた。

その手がかりは、回答者が「石綿」をいかに定義するかというところにあるのかもしれない。その一つの例として、ある男性は、異なる点から、石綿に関する仕事はしていないと述べた。「私の現在の仕事では石綿に近づく必要も無いはずだ」。しかし彼はその前に現在石綿セメント関係の仕事をしていると述べている。このことは異なる石綿の相対的危険についての誤解に関連しているのかもしれない（本章前部で議論）。かなり最近まで、石綿セメントに含まれるような、白石綿は害が無いと思われていた。よって個々の人々は、その行動について、彼らが確実で、信頼性のある情報であると信じているものを基礎に決定しているのかもしれないが、実はこれはすでに時代遅れなのである。このことは、各タイプの石綿に関するより良い情報や、石綿含有材料により引き起こされる異なる種類の相対的危険の必要性を強化するものである。

いかにしてその危険を減少させるかということについて詳しく述べた回答者はほとんどいなかった（非常に多くに人はこの話題は関係が無いと見ていたからだ）。しかしながら以下の予防措置は確認されていた。

- マスク/呼吸用保護具（これがもっとも一般的な答えであった）
- 材料を塗装して封じ込める（これは傷の無い石綿断熱ボードを扱うときのみ適切）
- ポリエチレン膜をかぶせる（汚染される可能性のある隔離されたエリア内の表面を覆うために用いられる）
- その周囲を封鎖するか、またはそのエリアを隔離する
- 破損を避ける
- 材料を湿らせる、または濡らす（作業中に飛散する石綿繊維の数を減らすため）
- 廃棄物には特別のバケツ（skip）を用いる
- 防護服を着用

「私が受けたコースを振り返ってみても、そんなに多くが変わったとは思いません。石綿関連の仕事をするには、陽圧フルフェイスマスク、フィルターシステムにつながった呼吸器具、手首の周りの部分にゴムの入った仕事着、手袋、ブーツで宇宙飛行士みたいに装備する必要があります。」

塗装工/装飾工、48歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「私だったら、ハーフマスクに、背中のところでは結ぶオーバーオール、ブーツ、手袋や使い捨てのものを身につける。」

塗装工/装飾工、30歳、個人業者、住居建築物取り扱い

4.8 汚染の除去

それぞれの人が彼らには関係がないと考える別の分野は、いかにして石綿に曝露された後、自分自身の身やエリアの汚染を除去するかということであった。それは主に、彼らはそもそも自分たちが石綿にさらされるなどとは思っていないためであった。これはまた、回答者たちが自分たちはあまり良く知らないと感じていた分野であったが、それは大方のところ、彼らがこの分野についての知識を得る必要性を感じていなかったからである。

「私はそんな状況にいたことが無い、だから関係ないですよ。もしかしたらずっと前にはあったかな。でも12時間も吸い込んでいながら、なぜ服についたものことなんか気にしなくちゃいけないのですか？」

塗装工/装飾工、30歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「そんな状況に遭わずに済めばいいなと思います。だからそれに対する答えはありません。スプレーみたいなものでひどいテントを裏庭に建てたり、ホースで水をかけられたりするような状況にならなければいいな、と思います。巨大な掃除機が、私から埃を吸い取ったりね・・・。」

配管工/ヒーティング技師、60歳、個人業者、住居、非住居建築物取り扱い

石綿のこの側面について詳しく話すことができた人々は、以下のことに注目する傾向が見られた。

- 手洗い、入浴、シャワー
- 作業着を捨てるか、または選択する
- マスク、手袋、使い捨てオーバーオールを捨てる

まれに仲間の作業者に掃除機をかけたりホースで水をかけたり、または作業者を検査してもらうことに言及した。

4.8.1 予防処置というより非常時処置と見る

作業者の中には、偶然自分が汚染されてしまう可能性があり、よって汚染処置について知識を持つことは有用であると認めた人もいる。これらの人々の間では、汚染の除去は予防処置や習慣的な措置ではなく緊急事態と考えられていた。何人かの作業者たちは、曝露については予め知っているだろうから使い捨てオーバーオールやマスクをすることを考えていたが、その他の人々には普通の作業着を着ているだろうから、曝露の急に起こる性質からして、着替えを持っていな

い可能性があると考えた人がいた。石綿除去専門家を職場で見たことがある、またはトレーニング時に聞いたことがあるため（エアロックエリアでの着替えなど）、除去の処置について認識している人もいたが、このタイプの処置を経験した人はほとんどいなかった。何人かの労働者たちは「汚染除去」が衣服を捨てたり洗ったりする以上のことであることを理解していたが、一方では曝露を受けた肺の汚染除去は実際可能なのだろうかと考えていた。

「すぐに気分が悪く感じるかもしれないが、その感じは無くなり、また気分がましになる。でもそれはまだ体のシステムの中にあるんです。これが石綿の悪い点だと読んだことがあります。だから自分の汚染除去が出来るとしたら、そのようにしてするのかと同様、興味深いことです。」

電気技師、31歳、個人業者、住居建築物取り扱い

4.8.2 従うのが難しい処理

この基礎的な衣服の洗濯や廃棄による汚染除去法は、汚染除去について知る必要があると考える人々に浸透したようである。しかし、このグループの何人かは、この処置に適切に従うことを妨げるような実用的な障害があると感じていた。出来るだけすぐにシャワーを浴びることに言及したものの、現場にシャワーの設備がありそうも無く、よって家に帰るまで汚染除去はできないと感じていた。人々は大きな現場での処置については述べることはできたが、小さな現場についてはできなかった。よって汚染除去のためにすべきことに関する知識と、それぞれの労働状況において実際出来ると感じていることの間にはギャップがあった。

「何をすべきか教わったことはあるし、聞いたこともあるけど、実際にやったことは無いです。」

整備工、64歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

「深刻な汚染なのかどうだか、それを測るものが無いですからね。なにか機械にでも入れたら、オーバーオールを洗わなければいけないとか、燃やさなければいけないとか言ってくれるものが無いですからね。これ一式は75ポンドしますから、もし毎日燃やさなければならぬとしたら、当然仕事の値段が上がってしまいますよ。」

配管工/ヒーティング技師、62歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「服を脱いでオーバーオールと一緒にバッグに入れるでしょ。でも石綿は法律で捨てなくちゃならないけど、すると石綿にさらされた服でいっぱいゴミ捨て袋を持って立っているのと同じことになるわけだ。」

その他のメンテナンス、63歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

4.9 石綿の廃棄

石綿の廃棄は、個々の人々が自分にとって特に関係のあることとは思わなかった問題の一つである。石綿の廃棄は、自分たちが専門の除去会社を使っている、または廃棄が他の人により手配されている大きな現場で働いているため、単純なことと思われていた。実際の除去に関した場合も、作業員たちは単に袋を二重にしてラベルを貼るか、または特別なスキップに入れて誰かが回収して廃棄してくれるのを待っていた。実は安全衛生庁は種類ごとの石綿含有材料除去に関する特別な手引き、および特別に個人保護具の使用、除去のための現場の準備、実際の除去と除去後の清掃に関する情報を供給している。

何人かの個人は、石綿は特別な埋立地に持っていかれるのだろうというぼんやりとした考えをもっており、自分たちがそれ以上知る必要があるとは感じていなかった。何人かは、廃棄物は処理後かなり長い間、回収されるまで放置されるかもしれないと加えた。全体的に、作業員たちは石綿除去問題が自分の仕事の一部とは見なしていなかった。

しかしながら、小規模な住居での仕事に携わる個人業者の中の何人かは、この問題により強い関心を持っていた。彼らは一般的に、石綿は地域の埋め立地に持ってきてはいけないことを知っていたが、その他はどうしてよいか戸惑っていた。その一つの解決法は、彼らが雇われたその仕事を完了させ、廃棄物を庭に置き（包んでラベルを貼る場合もあった）、その家主に地域の役所に持って行ってもらうように連絡を取るようになることであった。専門家を利用することも言及されたが、家主に役所に電話をさせる方が安上がりな方法と見なされていた。何人かの個人はその石綿廃棄のアプローチは正しい処置に従っていないと認めた。

「捨てちゃいけないのは知っています、ゴミ捨て場とかそういうところに持って行ってはいけないんです。私が以前にやったことがあるのは、コンクリートの下に埋めた、基礎打ちをやっている最中だったと思うけど。それを地下の土台に使ったのです。他の連中がポリエチレン袋に入れてゴミ捨て場に持っていつているのを知っているよ、こっそり隠して放り出すのです。でも私は、それは良いやり方とは思わない。あんたがそれで良いと言うとは思わないですよ。」

その他のメンテナンス、68歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「正直な告白が聞きたいなら、私が石綿を捨てるときは、ゴミ回収屋に金を払って持って行ってもらう、自分の車でゴミ捨て場に持って行く。」

その他のメンテナンス、53歳、個人業者、住居建築物取り扱い

4.10 主な問題点

4.10.1 知識の一部は「関係が無い」と見なされている

個々の人々の知識は二つのレベルで機能する：健康への危険に対する基礎的理解、しかしこの危険を最小限にするためにすべきことに関する詳細な知識は無い。作業員たちのほとんどは

この状況に甘んじているようであり、それ以上必要とは感じていなかった。特に自分たちには関係があるとは認識していない、石綿に関する仕事のいくつかの側面、例えば汚染除去、廃棄、または危険の縮小についてそうであった。それは彼らの労働生活、彼らが完成する作業、および彼らの仕事において、石綿は本当は危険ではないという一般的な認識により促されているようであった。したがって石綿が一般的な意味で危険な材料であると認識されている一方、個々の人々は自らの健康への実際の危険を受け入れたがらない、またはそれを拒否する傾向が見られる。このことは、メンテナンス作業をする人々が直面する危険の評価の不正確さに現れている。したがって、このように危険を低く評価する労働者たちにとって石綿に関する仕事に着いての基礎以上のものを学ぶ必要性を否定することは、まったく理にかなっているということになる。

4. 10. 2 . . . それ故の詳細な知識の欠如

石綿が識別された場合にすべきことについて個々人が自信を持っている一方、そもそも識別の仕方についてはっきりとはわかっていなかった。作業員たちは石綿の種類に注目する傾向が見られたが、石綿含有材料全般の詳細な理解ではなく、色（茶、青、白）やそれぞれの材料がもたらす相対的危険に関心が見られた（いくつかの例外はあったが）。

石綿取り扱いの戦略、その場を去る、その存在を報告する、または保護服を用いるなど、比較的単純なものであった。石綿に関する作業をする場合の危険を実際に減らす方法についての詳細な知識は一般的ではなかったが、主にそれは人々が自らの仕事ではこのような接触があるとは認め思っていないためであった。しかしながら、数人の回答者はこの問題に関して詳細な知識を持っていたし、採るべき一連の行動がわかっていた。汚染除去は、日々の労働生活に影響を及ぼすものではなく、単に緊急質と見なされており、また実際に適切に請け負うのは難しいと考えられていた。廃棄は役所利用が関係している場合がしばしばあり、また違法な行為も関係していた。

第5章. 石綿の識別

「何を知らなくちゃいけないかなんて、知らないです。どうやって見分けるかなんて知らない。にせものの石綿と本物の石綿の違いなんて僕にはわからない。だってシート状になったものもあるでしょ。僕にはあんまりわからないですよ。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

石綿の識別は作業者たちが、自信が無いと感じる場合が多いものである。そのこと自体、個々の人々が知らずに石綿に関わり自らを危険にさらす事があり得るので、安全行為を妨げる主な障害となってしまう可能性がある。したがって、作業者たちがいかにして石綿や石綿含有材料を識別するかということを理解するのは、この研究における非常に大切な部分である。インタビューの間参加者たちは、どのようにして石綿と石綿含有材料を識別し、理解したかということについて語るように依頼された。それには以下のことが含まれていた。

- 石綿を含む材料に接する頻度
- 石綿を含むと理解されている材料
- 石綿の識別に用いられる、視覚的、またはその他の手がかり
- 作業現場の石綿の存在がいかにして識別されるか

5.1 石綿との接触のレベル

半分以上の回答者たちは仕事中に石綿を含む材料に接することは「非常にまれ」であると述べた。その一方、質問を受けた労働者の5%以下が「毎日、またはほぼ毎日」石綿に接していると述べた。少数の人々は、主に石綿識別力に自信が無いため、このような材料に自分が接しているレベルを知らなかった。ほぼ毎日から毎月の頻度にわたり石綿と接触をしている少数のグループがいた。この人達の大多数は市役所所有の建物（例えば住宅や学校などの公的建築物）の仕事をしていた。

5.1.1 もうこれにお目にかかることは無い

建設部門に何年もいた作業者たちは、彼らが石綿に接する量が異なる二つの別の時期があったことを認めていた。これらは大雑把に、「石綿認識」前、および後と定義されていた。これらのうち最初のは石綿の危険が知られる前で起こった。作業者たちは一般的に、自分の健康を護る措置を採らないという結果となった。何人もの作業者たちは違いに気付いた。主に石綿はかつて自分たちが頻繁に用いていた材料であったが、今では彼らにとっては問題ではなくなった、ということに気付いた。

「10年から15年くらい前だと思うけど、みんなもっと石綿さらされていたけど、今じゃ自分がそれにさらされているとは全然思わないよ。」

塗装工/装飾工、48歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「そんなにしょっちゅうだったとは言わないけれど、私が一番よくやっていたのは耐火粘土で、壊れかけたジョイントを再生することでした。それを扱いはするけど、昔のように切ったりそういうことはしない。」

配管工/ヒーティング技師、62 歳、個人業者、住居建築物取り扱い

ある一個人は、石綿曝露の危険に対する認識が高まりつつある間の自分の行動の変化について、以下の引用と共に説明した。

「しかし、私たちが石綿を取り除いていた間は、予防策なんてなんにもとらなかったですよ。私たちはそれを剥ぎ取ってバケツに入れて棄てて・・・」

「それは 76 年と 78 年の間だと思います。その頃港にやってきたのですが、彼らはまだ何かやらなくてはならないことがある時はコンパートメントを閉鎖したものです。そして私たちが入るのを許されるまで、専門家を呼んで石綿を除去し、テストしました。でもそれまでは、彼らはそんなことわざわざしなかったのです。」

整備工、64 歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

もし、自分の過去の経験を通じ、または同僚が過去の経験を語るのを聞いて個々の人々が石綿曝露は大量の石綿の存在にのみ関係しているとして注目したら、それは行動に影響する可能性がある。そのことは現在の危険が比較的重要でないように見え、よって真剣に受け止められないかもしれないということを意味するかもしれない。

5.1.2 石綿はあるが問題ではない

意識向上キャンペーンおよび石綿の建築物からの除去は、多くの個人にとってその行動と石綿との接触における大きな転機となった。これらの活動は、知識の増加と職場において石綿を識別したいというより強い願望という結果となった。これと結びついて、古い建物での作業は石綿との接触の可能性を高めることになるという、はっきりとした理解が見られた。その一方で、新しい建物でのみ作業をする者はそのような材料との接触レベルは非常に低いと信じていた。石綿がもはや用いられなくなった、打ち切り時の認識にはいくらかの違いが見られた（第 2 章にて議論された通り）。

「明らかに新しい建物、または 80 年代以降に建てられたものは石綿に接触する可能性が低い。その一方、明らかにその前のもの全では、石綿に接触するということになる。」

電気技師、34 歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

「ええ、うんと最近はそれほどお目にかかっていないね。でもまた・・・あんなにたくさん新しい建物があるけど、新しい建物には全然無いよ」

電気技師、56 歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

何人もの個人は、石綿含有材料のある現場で作業をしていながら、潜在的な危険は全て減らすよう予防措置が採られたのだから、自分たちへのリスクのレベルは低いと理解していた。それらの措置には石綿の除去、「立ち入り禁止」エリア、石綿があるエリアの視覚的な警告が含まれていた。したがって、そこには石綿識別におけるよい習慣の証拠が見られ、視覚的な警告は危険の可能性のあるエリアを強調するために効果的な方法であるようだ。あまり明らかではないのは、これらのエリアがどのくらいちゃんと封じられているかということである。

5.1.3 私の専門じゃない

何人かの作業員たちは、普通は石綿に接することは無いが、特定の仕事では接する機会が多いと述べた。その他の人々は依然として、石綿識別は特に彼らの業種には関係が無いと考えていた。

「私は毎日カプセルに入った石綿のそばを通り過ぎていますよ。ね、身の回りにはあるんですよ。」

その他のメンテナンス、47歳、大企業従業員、非住居建築物取り扱い

「あなたが何を質問して来るのか興味があるんですよ。だって配管工としては接する石綿の種類は限りがありますからね。」

配管工/ヒーティング技師、60歳、個人業者、住居、非住居建築物取り扱い

「それはより建設産業に関することでしょう。私達は、本当は建設業じゃなくて、よりメンテナンスに近いですからね。」

大工/指物師、47歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

このことは前章で採り上げた、メンテナンス業に関する全ての人々は潜在的に危険にさらされているというメッセージを、強調する必要があるという点を繰り返すことになる。

5.2 石綿の識別法

作業員たちは石綿を識別するいくつかの方法について、また自分の「見抜く」力だけを頼りに、サンプルを採って検査をしてもらおうこと無しにいかに識別出来るのか討論した（何人かは検査やサンプル採取が、時折いかに必要であるかということについて語ったが）。石綿繊維は実は、通常は小さすぎて見えない。製品に用いられるミネラルウールやその他の材料は石綿に似ているかもしれない。はっきりと知る唯一の方法は材料の小片を研究所に持って行き、分析してもらうことである。資格を持った石綿検査官がサンプルを採取しなければならない。彼らはその材料からサンプルを採り、そのようにして適切にサンプルが採れるかということがわかるように訓練されている。

数人の作業者たちは、彼らが受けたトレーニングコースで、どのように石綿を見分けるように習ったかということについて語った。そのようなトレーニングは長さや視野が様々で、より大がかりなトレーニング、または見習い期間の一部、または石綿の意識向上に特別に焦点を合わせたものであった。このトレーニングの経路は、しかしながら、比較的まれである。

5.2.1 自分の感覚に頼る

何人もの回答者たちは石綿を、色、質感、味、において見分けることが出来ると感じていた。自分の感覚に頼る作業者は、その識別過程ですでに自らを石綿にさらしている可能性がある。個々の人々が現在この方法で、いかにして識別を行っているかということを実引用がいくつある（以下に示す）。

「主にその色だけですね。あのような種類の当てもの、特にそれが断熱材なら、絶対石綿だってわかりますよ。またはそれは石綿だという推察になります。へりのところで磨り減って、粉っぽいですからね。」

配管工/ヒーティング技師、57歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「主に味ですね。それと匂い。これはとっても・・・石綿っていうのはとっても、ドライな味のように、その粉じんは独特の味ですよ。」

塗装工/装飾工、36歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「僕は石綿の雨どいは見分けられますからね。これはずっしりした、コンクリートでできているように見えるものです。これは本当に・・・こんな見かけのものは他にないですよ。」

塗装工/装飾工、35歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「古い建物では、だいたい劣化していて、崩れやすいから見つけやすいです。ぼろぼろになったパイプはたぶん石綿ですよ。アルミニウムの可能性もあるけれど、わかりやすいよ。」

塗装工/装飾工、59歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「・・・ふわふわしたものがパイプの周りについているんですよ、コットンウールみたいな。」

その他のメンテナンス、63歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

5.2.3 多くの人は石綿の識別ができない

自分がもし石綿に接することがあっても、特に自分にはなじみの無い形態であったら、自分の識別力には自信が無いとはっきりと記した回答者が何人もいた。何人かの作業者たちはどの石綿で

あるか結論するには、自分の経験の範囲は限られているということを実感していたが、その一方でその他の人々はいかなる形態の石綿も見分けがつかないと感じていた。これらの作業者は中年層である傾向があった。おそらく、年配の作業者のような徹底的な石綿に関する作業経験、およびより最近の見習いコースで受けられる石綿認識トレーニングのどちらも経験していないのであろう。

「ええ、でも確かに今までに見たことの無いタイプがあって、茶石綿は見たことがないです。だからそれに接することがあっても私にはわかりませんよ。」

電気技師、34歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「つまり自営業の人には、知識、知ること、というのはとても大事なんです。それなのに言っているように、僕は違う種類の石綿を区別する方法を知らないし、石綿がどの製品に使われているか、知らないんですよ。」

塗装工/装飾工、33歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「(知っているのは) 本当に自分が見るものだけです、ね、自分が本当に見るものだけです。本当に、正直言って、この今の瞬間に石綿が一辺空から降ってきて私の頭の上に落ちたとしても、それが何かわかりませんよ、全然わかりません。」

電気技師、55歳、住居、非住居建築物取り扱い

「もし一枚のボードを見たとしても、それがグラスファイバーの壁なのか、漆喰の壁なのか、石綿の壁なのか私にはわかりません。」

電気技師、43歳、大企業の従業員、住居建築物取り扱い

5.2.4 正式な識別はより珍しい

作業員たちが示したその他の石綿識別方法は、サンプルの正式な鑑定を依頼すること、警戒ステッカー/標識の表示、または石綿登録係に伝えることであった。これらの方法は概して、商業および公的建築物に関する大規模な現場で働く人々により言及された。

「・・・まずいつやってもらったか聞くでしょう、すると彼らは『そうだね、私たちがここに引っ越して来たときはもうあったからね』、『じゃあいつここに越したんですか?』、『20年くらい前かな』、20年前だって言うんですよ。私だったら検査してもらっていましたがね、としか言いようが無い。」

その他のメンテナンス、38歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

「私達の職場にあったのは、天井のある部分で電灯がついているところに『石綿の危険性』と印がしてあったんです。彼ら実際に石綿があると思われるところに印をつけたんです・・・。」

電気技師、43歳、大企業の従業員、住居建築物取り扱い

個人宅で作業をする人々の大多数は、家の持ち主は石綿が存在するということを知らない場合が多く、よって、建設作業員にその存在を知らせることができないのだという意見を持っていた。

「誰かの家で仕事をしているとするでしょう、個人宅で。ミスターとミセス何とかさんのために仕事をしているとするでしょう、彼らは大抵何にも知らないのですよ。だから石綿を確認するのは結局私がやらなくちゃならないのですよ。」

塗装工/装飾工、35歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「すぐその女性のお年寄りに、あなたの家の中に石綿の天井があるよ、って示してあげたことがあります。」

配管工/ヒーティング技師、30歳、個人業者、住居建築物取り扱い

5.3.2 非公式な情報への依存

多分正式な処置に頼ることなく石綿を識別できるという自分の自信のため（または同僚の自信のため）、石綿含有材料の可能性のあるものの専門家による検査の例はかなり少なかった。これらの選択肢は大抵の場合、大きな現場または商業用、公用の建物で働く労働者たちにしか与えられていなかった。回答者の多くは個人所有の住宅地で雇われているためこのような選択肢は持っておらず、識別は未だに主な問題である。

第6章. 仕事における石綿経験

「それでこの仕事の監督が言うには、『石綿をスキップから取り出さないとだめだぞ』。私は言ったんです、『スキップから石綿を取り出したりしませんよ』とね。そして『実は何もする気がないのですよ。うちに帰ります』、『だってあんたがこれをちよん切ったところの繊維は、ドアが無いんですから、全部外に出て来ちゃいましたよ。全部外に……。そして屋根まで取り外ししたら爆発しちゃいますよ。私はそんなことやりませんからね。家に帰ります』と言ったのです。」

その他のメンテナンス、63歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

この報告はここまでのところ、人々が受けた石綿に関するメッセージ、彼らのそれに対する認識、石綿を用いた、または石綿の近辺で働くことによる危険に対する個々の姿勢について触れてきた。これらの全てが彼らの行動に影響を及ぼす。この章においては、作業員たちが石綿や石綿含有材料と共に仕事をして来た経歴における実際の経験についてさらに詳しく検討する。それには、石綿の危険が手際よく処理されていたか否かに関する作業員たちの個人的な評価と共に、よい習慣も悪い習慣も含まれている。

よい習慣の例について語るよう依頼されて、彼らが見解を同じくした主な点は：

- 作業の中止、または停止
- 不必要な破損や繊維の放出を避けること
- 材料を湿らせること
- 廃棄物の安全な処理

回答者より示された例には、実際の良い習慣行為のうちのいくつかが含まれていなかった。それらは、汚染された衣服をどのように処理すべきか、自宅での洗濯、作業中の清掃、そして電動工具ではなく、手動工具を選ぶことだった。

6.1 作業を一時中止、または停止する

石綿を発見した可能性がある場合の効果的な処理の仕方は、作業を止める事である。その状況を判断し、材料を検査してもらい、誰かにその発見を報告し、または同僚たちを保護するための一時的な中断と見なすものがいた。作業を止めることは良い習慣であると思なされていたのである。作業の停止は3つの異なる動機と関係していた：

- そのエリアを封鎖/隔離する
- 石綿を識別する
- その仕事を辞める

より権力のある役職にあるものは仕事を停止することやエリアの封鎖について語った一方、そ

のほかの人々は単にその場から去ることを語った。多くの回答者が、作業中に石綿が発見されたために仕事を辞めたときのことを、自信を持って詳しく述べた。それが正しい行動であると一般的に感じられていた。

例1：他の人がそうしなくてもその場から去る

この例ではある個人が、いかにして自分が彼の親方が平気で作業を続ける現場から去ることを決断するに至ったかについて述べた。

「ええ、前にバーミングハムの教会にいた時のことですが、そこには大きなボイラーがあって、それはひどく古くて、天井を抜いて通した熱気送管でした。これを壊さなくてはならなくて、親方が大金槌で叩き壊していたのです。僕が『それは石綿ですよ？』と言うと彼は、『いや、気にしなくていいのだよ』と言う。だから『じゃああなたがやればいい』と言って僕は外に出たんです。だってその部屋と来たら埃だらけで、だから彼にやらせておいたのですよ。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

彼は自分をこのような決心に至らせた因子について述べた。それらは：

- その現場には他にも彼が出来る作業がいくつもあったと言う事実
- 発生していた埃の量 「石綿ではなかったとしても、正直言って居心地の良い場所じゃなかったですね」
- 彼は自信を持ってその材料が石綿であると確認した
- 防護マスクが無かった
- そこは閉じた空間であった（非常に小さな部屋であった）
- 親方のことはよく知っていた
- その仕事には充分時間が与えられていた

この回答者は特に自分が上手く危険を処理したとは感じておらず、多分親方も作業を止めて専門家を呼ぶよう主張するべきだったのだと感じていた。しかしながら、彼は自分が親方に「壊すのを止めろ」と言えるとは思っていなかった。この親方の態度は確かに彼に、石綿曝露の危険は誇張されているのだろうかという疑問を持たせたが、この場合は彼の行動に影響を及ぼさなかった。

6.2 不必要な破損と繊維の放出

多くの回答者たちは、空気中に石綿繊維が放出されるようなことは一切避ける必要があることを認識しているようだった。何名かは自分の仕事の中でいかにその知識を利用したか、ということについて例を挙げた。しかしながら石綿繊維の放出を実際に回避した程度は様々であった。多くの回答者が、「気をつけて」、材料を叩いて壊さないということを語った。電動ではなく、手動の道具を使うこと（繊維の放出を減らすために勧められている方法）は彼らの話題には上らなかった。

例 2：初期の識別と同僚からのアドバイス

ある個人はチームで仕事をしているとき、屋根に石綿が含まれていると仕事に取り掛かる前にアドバイスを受けていたときの経験について述べた。そのチームの人々は、屋外で作業をしているのだし、石綿シートが無傷のまま取り出されたので危険性は非常に少ないと伝えられた。彼はこのアドバイスは適切なものであったと確信しており、またもしその作業が屋内で行われていたら会社は専門家を呼んでいただろうと考えていた。チームは解体用バーとねじ回しを用いた（安全衛生庁が推奨するボルトカッターではなく）。彼らは壁にはセメントシートを貼り、石綿除去専門家が包装して回収するのを待った。マスクはあったが、彼は装着したかどうか思い出せなかった。衣服について聞かれると彼は、「誰もそれが適切だとは思いつかなかった」と答えた。彼は、危険は正しく管理されたと信じていた。彼らがいかにゴミを掃除したか訪ねると、彼はこう答えた、

「その作業をしてくれた彼らは注意していたから、ほとんど埃なんて無かった。それにいくらか端損したところがあったとしても、全く最小限だった。」

大工/指物師、33 歳、大会社の従業員、住居建築物取り扱い

彼の行動に影響を及ぼした可能性のあるものは：

- その仕事を始める前に、屋根は石綿だとアドバイスを受けていたこと
- 彼が特にその仕事についてのアドバイスを受けていたこと
- 彼と一緒に仕事をしている親方や同僚を信頼していたこと

セメントは壊すべきではないと言うメッセージは明らかに理解され、それに基づいて行動がとられた。しかしながら、その作業は充分管理されていたわけではなかった。セメントを湿らせていないし、個人用の保護具の使用が無く、取り除いた材料の防護が無かった（例えば施錠可能なスキップ）。しかしながら、これらの省略にもかかわらず、この個人は自分の健康が充分保護されたと感じていたが、そうは行かないようである。

石綿の扱いに関して他の人のアドバイスに頼るのは明らかに危険である。それはその人達がとるべき行動について、十分なサポートを与えられるほど詳細な知識を持っているということが全く確かではないからである。作業者にしてみれば、自分でいくらかの知識が無ければ、受けたアドバイスが実際に自分たちの健康を最善な方法で護れるかを判断するのは難しい。例 2 では、良いアドバイスを受けながらも良い習慣のある側面はなおざりになっている（例えば衣服やマスクについては誰も述べなかった）し、いくらか詳しい知識を自分で持たないためその人は、さらに採るべき予防策があったかどうか調べることもできなかった。

6.3 個人用の保護具の使用

人々はマスクおよびその他の器具の使用が石綿曝露から自らを護る方法と見なすことが多かつ

た。実は安全衛生庁の手引きではこれは曝露に対する最低の線の防御であると述べているのだが、多くの作業者は、これのみが曝露を避けるに十分であると信じていたのである。いかに最適に、そしていつこの器具を用いるかということに関する詳しい知識をどの程度持っているかは人により非常に異なった。何人もの労働者たちが、どのマスクをどの仕事に用いるか、またはより一般的に自分の仕事のなかでどのマスクを使うべきかがわからなかったという、自分の実際の経験の例を引用した。さらにもしこの器具の使用が自分で負担しなければならない費用を伴う場合、そのことは適切な予防措置をとる上で障害になる可能性がある。作業者たちは高価な器具を捨てたがらないし、たった一回使っただけで捨てるべき器具も、費用的な理由から再使用するかもしれない。

仕事でどのように石綿に関ったかという例を特定するよう依頼され、回答者たちはしばしば、自分の石綿の経験としてより代表的な日々の経験よりも、大規模で極端な曝露の例に注目した。話題的となったのは、自分たちが使わなければならないようなより日常的な器具よりも、専門家が石綿を取り除いたことや、その専門家たちが用いた防護服や器具についての、よりドラマティックな話に注目した。これらの出来事は、保護具がより「当たり前」である回答者たちの日々の仕事からは、どこかかけ離れたものであった。危険なのは、これらの極端な例に注目することにより（この報告書全体を通じて発生するテーマであるが）、日々の曝露が「最低限」、したがって比較すれば本当に危険ではないと過小評価されることである。

例3：過去の極端な経験は、現在の安全性への関心に優先してしまう可能性がある

ある人はその経歴の初期における珍しい出来事について回想した。彼は石綿除去員たちが作業を続行する前に照明の電源が切っているかどうか調べるように頼まれた。特に彼は照明のスイッチのねじをはずして電気が来ていないことを確認し、必要ならば関連のスイッチボードからヒューズをはずさなければならなかった。彼の作業には石綿を壊す作業は関係していなかったものの、すでに除去作業は始まっていたので、石綿汚染のはなはだしいエリアでなければならなかった。彼はその仕事の監督がいかにはっきりと、作業場に入る前に二重テントのエリアで屋外着を脱ぎ、呼吸保護具と白いスーツを着けること、そしてその後いかにしてまた屋外着に着替えるかということを知ってほしいかを説明した。彼が作業中には除去作業は完全に中断され、彼は他の作業員は一切なく、ゴミ袋ばかりがあった事に気づいた。彼はその経験全てが恐ろしいものと感じた。

この例は、石綿に関する仕事の例について一つ例を挙げるように依頼された上で提供されたものである。しかしインタビューの別の時点では、彼はより規則的で最近の、そして普通の石綿との接触があることを明かした。そこで彼は保護具の使い方においてよい習慣を示すことができた。

「仕事では、『石綿の危険』と印された天井に照明が付いているあるエリアがあります。彼らは

実際に石綿があると思われる壁全てに印をつけるんですが、それが私たちが石綿に一番近づくところです。ですからその時普通はマスクを着けるだけです。照明の作業をするときは、その作業をして、全てはゴミ箱行きです（白い紙スーツとマスク）。」

電気技師、43歳、大企業の従業員、住居建築物取り扱い

彼の石綿をめぐる行動に影響を与えたのは：

- 無償で手に入る保護服
- 確立された手順
- はっきりとした石綿表示

何人もの人が自分は保護具を正しく用いているのかははっきりとはわからなかった。数人はマスクの種類を述べ、自分が正しいものを用いていると自信があった一方、その他の人々はマスクを使わなければならないことはわかっている、どの種類を使えばいいのかわからなかった。ほとんどの人は特別なフィルターも付いていない、簡単なマスクしか使っていないようであった。マスクを使用後廃棄することを語る人もいれば、いかにも同じマスクを繰り返し用いているかのように「私のマスク」について語る人もいた。何人かの人々が装着者の保護という有用性のために非常に信頼している、より複雑なマスクは使い捨てとは見なされていなかった。以下の引用はその例を示している。

「ええ、ぐるりとつける二重のゴムね、これも多くの人、多くの若い連中は嫌がるんですよ。顔に跡が付きますからね。だからゴーグルをして、大きなマスクをして、その上に跡の付くものをするでしょ。若い連中は格好を気にするのですよ。だって時には跡がとれるまで二日かかりますからね。それで若いのにこれを使えって言うのですか・・・金曜日の夜に、遊びに行こうって言うのに・・・アライアンス・アンド・レスターの（顔に傷跡がある）アル・カポネみたいですね！でもこれは効果的なのですよ。その他は、そんなもの気にしないで捨てちゃえばいいのです。いまは小さな黄色のフィルターみたいなものが付いた、三角形のマスクが手に入りますからね。」

その他のメンテナンス、63歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

「換気装置を使うことのほうが多いです。ちゃんとした・・・なんという名前だったかな・・・。これは完全に密封されていて、両側に二つずつ通気口があります。それで空気をフィルターにかけるんです。これはかなりいいやつですよ。」

塗装工/装飾工、33歳、個人業者、住居建築物取り扱い

6.4 材料を湿らせる

何人もの人が材料を湿らせることを良い習慣として取り上げた。石綿を湿らせることにより作

業中に放出される石綿繊維の数が減る。また、青石綿と茶石綿は水を吸収しにくい、湿潤剤（水ではなく）の利用が石綿の液体吸収を助ける。安全衛生庁の手引きははっきりと（作業）エリアを湿らせすぎてはいけないと述べているし、電気装置の近辺で湿らせる作業を行うことによる害がある。

（作業）エリアを湿らせることが良い習慣の一つであるといういくら基礎的な知識を持つてはいるが、実際に人々がこの方法を適用する仕方は必ずしも現在の手引きに従っていないようであった。例えば何人かの回答者は、材料に軽く水をスプレーでかけるのではなく、エリアをずぶぬれにしたりホースで水を撒いたりすることについて語った。石綿繊維が空気中に飛ぶことを妨げるというメッセージはこれらの個人に伝わったが、繊維を限られたエリアに閉じ込めるという考え方はほとんどの人々に届かなかった。

例 4：効果的な除去における湿し段階

この個人は個人業者で、大抵は家の建て増しや改装を行っていた。彼は 6 年前の物置から石綿の被覆を取り除く作業について語った。彼はその石綿を硬い青石綿と述べたが、それはその職歴の早いうちに風呂場パネル、そして階段やドアの耐火処理に用いたものであった。

「それは私が解体し、市役所がもって行きました。彼らの指導で解体したのですよ。ホースで水をかけ、注意深くネジや釘を取り除き、分厚い大工用のポリエチレンで包んで、丁寧にテープで閉じました。吸い込みたくなかったんです。だからそれはいつも濡らしていたし、作業は大きなシートの上でしました。役所の人達は私がやっていることに満足していましたし、それは市役所の指示によるものでしたからね。それは市役所に注意深く捨ててもらうため、前庭に置きました。その家のご婦人が言うには、彼らはただ拾って行って、ポリエチレンは全部剥ぎ取り、中身が全部出てきちゃって・・・回収車のゴミの中に放り込んだんだそうですよ。[名前]市役所のゴミ捨てチームでしたがね・・・。私は見ていないんです。そのご婦人が教えてくれたんです。せっかく注意深く扱ったのに・・・」

メンテナンス一般/大工、68 歳、個人業者、住居建築物取り扱い

彼が石綿を扱うことが出来ると思った理由は：

- 自己の職歴の早いうちのこの経験のために石綿を見分けることが出来る。
- 自分が仕事をしたその家の人達はあのことを真剣に思っているようだった。
- 地域の役所から特にその仕事に関する、正式なものと思われる詳しい指示を受けた。

彼は自分が採用した良い習慣を信じていたが、最後の廃棄の扱われ方に明らかにがっかりしてしまっていた。そのことはその後、彼の地域の役所からアドバイスを受けることに対する考え方に影響を及ぼしたようであった。

例5：第三者グループの利用は誤った情報の原因となり得る

これは少し前に起こったことであるが、手引きが特に第三者グループを解して伝わった場合、いかに誤って解釈されるかということを示す例である。この場合、この個人はしばしば風呂場のタイル貼りをしていた。彼は特に14年ほど前、石綿被覆をした温水給湯器をある家で見つけたことについて語った。彼はそれを扱うことをためらったため、家主が市役所の環境衛生部に問い合わせたアドバイスを求めた。

「それで彼らは非常に、何と言うか・・・、無関心そうでした。彼らにとっては問題じゃないかもしれませんが、私には問題です。なのに彼らが言うことには、配管工に水に浸せと言いなさい。水に浸してビニール袋に入れて、・・・ビニール袋をかぶせなさい、と。それが彼らの態度だったのでしょ・・・。」

配管工/ヒーティング技師、57歳、個人業者、住居建築物取り扱い

6.5 廃棄

人々は仕事で石綿に接した経験として頻繁に石綿除去について語った。これらの労働者たちの何人かにとっては、石綿と知りながら扱った唯一の経験は、他のメンテナンス作業ではなく、現場から石綿を取り除くよう命ぜられた時のことであった。このインタビューの前の部分では、廃棄は人々が詳細な情報が無くても気にならない主な分野の一つであったので、それは興味深いことである（第5章参照）。人々が廃棄に注目する一つの原因は、単に彼らが石綿識別技術を持たないために、石綿とは気付かずに他の方法で扱ってきたということかもしれない。それとは対照的に、石綿を廃棄するように言われた時は、それはすでに危険な材料であると識別されているのである。

何人かの人々はさらに石綿廃棄の準備に関する詳細を提供することができた。彼らは石綿の廃物を、頑丈なビニールとテープで包み、または二重にした袋に入れることについて語った。回答者の何人かは、特別な石綿廃棄用の蓋つきのゴミ箱やバケツ (skip) のある大きな現場で作業をした経験を持っていた。その他の良い習慣には石綿廃棄物除去の専門会社を利用すること、または包んだ石綿を市役所に回収してもらうよう手配することも含まれていた。

個人宅で作業をする回答者は、直接市役所と廃棄物の回収の手配をつけた。他の人々は、廃棄物を取り除き包んで、家主に市役所に回収してもらうよう指示した。このアプローチが除去に伴う費用を避けるために採られたのか、または単にそのようなサービスを誰が提供するかを知らなかっただけなのかは定かではなかった。通常の埋立地に公然と石綿を持ち込むことはできないと述べる人がかなり多かったが、公営のゴミ捨て場での隠れた投棄も実際に起こっていた。一人の回答者は、材料を検査してもらうことの利点には、通常の埋立地を使うことが出来る証書（石綿を含まないということを示した）をもらえることであった。

例6：廃棄における役所の重要な役割

一人の作業者は個人宅に本核はぎ板を風呂の片側に取り付けるよう依頼を受けた時のことを回想した。

「古い板を取り外して新しいものを取り付ける必要があるか決めようとして、ちょうど軽く叩いてみて、ドリルで穴をあけようかどうしようか考えていたのです。私は石綿のことを考えてその女性に言ったんです、『これは石綿かもしれませんよ』と。その瞬間『それなら、気をつけないと』と思うでしょ。でも覚えているのですが、私はそのときはそれほど気をつけてはいなかったのです・・・あんまりね・・・。つまり、ドリルをかけちゃいけないって言うのは知っていたのですが、壊してはいけないということは知らなかったのです。実は私はその板を壊さず、市役所に電話したのです。問い合わせの電話番号があることを知っていたんです。そうしたら役所の人、絶対に壊したりドリルをかけちゃいけないと言いました。またそこが住居用であるか、商業用であるか聞いてきました。なぜならもし商業用なら、石綿を除去してもらうために私が金をはらわなくてはならないからです。そこで私は、問題なのは実は私が・・・。私は彼らにすっかり素直に言ったのです、自分が自営業の大工であること、ある人の家で仕事をしていることを。そしてこう言ったのです。私はこの作業から手を引いて、この家の人が役所に『回収してくれませんか』と電話することにしてもいいと。すると役所は私が包んでテープをし、外に出しておけばいいことにしてくれました。」

大工/指物師、49歳、個人業者、住居建築物取り扱い

その回答者は、市役所と交渉することにより廃棄物の安全な処理を確認しようとしたのである。専門家を呼んだり特別なスキップを使ったりすることは、明らかに個人用住宅での小規模な仕事で通常期待される範囲以外のものであると考えられている。この回答者が市役所の電話アドバイスを知っていたことと、役所の柔軟な対応がこのアプローチを可能にした重要因子であったようだ。これは石綿を基礎打ちに隠したり、ゴミ袋に隠し入れて通常の埋立地に持って行ったりした回答者の例とは対照的である。

作業者たちが規模の小さな現場や住居で作業をする場合、石綿を扱う上でモットの厄介な因子はその除去である。個人宅市場で働く多くの個人業者たちは石綿廃物の扱い方をよく知らなかった。中には石綿を専門業者のスキップに入れて公営のゴミ捨て場に合法的に持って行くことが可能であった頃を回想する人がいたが、多くの人はこのような便利さはもはや存在しないと考えていた。何人かは法律が変わったことで返って隠れ投棄が促され、廃棄をより危険なものにしてしまっていると感じていた。クライアントの石綿曝露に伴う危険に対する知識や配慮の無さは、作業者たちが対処しなければならない今一つの問題であった。

例7：回収者がいない

大きな公的組織のために仕事をするある整備工は、エアコンのパイプ交換をしている最中に石綿を確認したことを回想した。石綿であることが明らかに確認され、その廃棄のために正しい予防措置が採られたにも関わらず、実際にそれを現場から除去する担当であった人がその責任を満たさなかったようであった。

「青だか白だか、または茶だか、どのタイプの石綿であるかは知らなかったのですが、監督に会って言ったんです、『ほら、あれには石綿が入っていると思うのですが、どうも気に入りませんね』と。すると彼は、『じゃあ注意して取り外し、袋に入れて庭に持って来なさい。そうしたら私たちが捨てるから。』私は配管の被覆の損壊が最低限になるようにする以外は、何も予防措置を採らなかったのです。被覆材はそのまま取り除かず配管全てを外し、袋に詰め、しっかり封をして、印しを付けてから庭に出したのです。でもそれは庭に何ヶ月も放置されたままでした。私の知る限り、あれはとうとう適切に廃棄されませんでしたよ。」

整備工、64歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

例8：個人宅所有者が全てを握って譲らない

この例は、洪水や火事で損壊した家の改装の専門業者が、ある家からタイルを取り除く作業を行った際に経験したことについてである。

「・・・それでその女性は頑固に、そんなことはどうでもいいとか何とか言ったんです。だから私は言ったのです、『いいえ、検査してもらわなければだめです』と。というわけでタイルを検査しに来てもらうために石綿チームを呼んだのです。でも彼らが到着すると、タイルがなくなっていたのです。その女性が全部取ってしまったのですよ。それも彼女次第ですけどね・・・。石綿の危険について説明してもらっても、自分で処理する危険を冒したのですから。彼女にはそのタイルを単にスキップに入れてはいけない、ということを指摘しておきました。そんなものを単に自分の地域のスキップに放り込むわけには行かないのですよ。汚染物処理場を通さなければならぬのです。だから考えも無く回収したりしないのが一番です。」

その他のメンテナンス、38歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

この人は石綿の適切な扱い方に関する知識を持っていたので、それでも自分を何とか保護することはできた。しかし、その他の知識のあまり無い人達、またはビジネス上のプレッシャーから、クライアントの要求を満たさなければならないと感じる人達であればこのようにできると感じなかったかもしれない。

6.6 可能性のある曝露の例

何人もの作業者が、良い習慣とは思えないやり方で石綿関係の作業をした経験や、推奨される